特集 あそび 今、大人も出番

あそびを仕掛ける

―― 中高生へ仕掛ける「あそび」とは何だろうか ――

和光中高　森下一期

さて、何を書こうか、とまどっています。どうやら、私が和光中学校の新入生保護者会でしゃべったことを鈴木さん(事務局長)が聞いていて、何か感ずるところがあって森下に何か書かせたらどうか、ということになったようです。その中味は聞いていないので、さて、という状態にあります。

「あそびを仕掛ける」とは、大人が子どもに働きかけることを指しています。つまり、大人と子どもとの関係の問題と見ることができます。常日頃、子どもを一個の人間として見る、ということは押さえてきているつもりですが、そこからは対等に接する(もちろん経験というか立場の違いはあるという前提ですが）という関わり方が出てくるだけです。したがって、こちらが提起することに彼や彼女が対応することが問題となり、彼や彼女からの提起にも受けて立つ、ということになっていきます。

このことは基本的には変わらないのですが、最近、「思い通りにならない他者」という言葉を目にして、これまで今ひとつ欠けていると思っていたことが氷解した感がしました。

それは、一個の人間として見る:対等、という言葉に対して、いつも大人と子どもとは違う、という主張が対置され、事実違う部分があるので、但し書きとして経験・立場をつけることになっていました。つまり、一個の人間として見る、ということには関係性の中味までは表現していないということです。また、関係性そのものを必ずしも前提としていない、と言えます。若干わかりづらいかもしれませんが、一個の人間として見る、ということには、関わることが不可欠なものとしては想定されていません。

それに対し、「思い通りにならない他者」というときには、人との関わりを前提としての把握になります。働きかけることが前提となって、子ども（それだけに限らず大人も)を見る、ということであり、「思い通りになる」か「思い通りにならない」という働きかけから生ずることに関係性が含み込まれています。(この言葉自体は、小玉重夫さんの『シチズンシップの教育思想』にあり、同書の展開も興味深いものです)

今ひとつ、この問題を考えるとき、次のことにも目を向けておきたいと思います。奥平康照さんが学習意欲の問題で、生物学的自然的な学習意欲と社会的な意味に支えられての意欲を、前者を基礎的、後者を高次のものと仕分けて論じています(「社会参入過程としての学校、授業、学習」『教育』2004年4月)。そして、前者は社会的には意味もなく目的もなくても繰り返しながら上

手になっていくことが楽しい、どんなことでも「わかる」「できる」ことが嬉しいとしていますが、その通りだと思います。

よく、あそびは学びだと言われますが、それはあそびがこの生物的自然的学習意欲の段階にあるからでしょう。

さて、本題に入らなければなりませんが、ここでは、中高生に焦点を当てて考えたいと思います。

中高生にとって遊びとは何でしょうか。手労研で遊びを考えてきているとき、中高生についてはほとんど取り上げてきていなかったと思います。労働とか、技術とかいった課題だったように思います。一方でカイヨワのあそび論などが話題となるときは、大人を含めてのものでした。また、大人について、仕事と遊びの関わりのようなことも話題となったことがあると思います。遊びと仕事が一体化するといった人がいたり、そういった場面があるといったことだったように思います。それらは必ずしも深められていなかったように思いますが、次のような形で問題設定できるかもしれません。

私たち大人も、遊び、というとき、さまざまな場面を設定しています。例えば、私の場合は、今は机、椅子などの家具をつくることは最高の遊びです。レストランに食事に行くのも楽しい限りです。車を運転するのも好きです。仕事の中で、挨拶を考えるのは苦痛以外の何者でもないのですが、経理処理のアプリケーションを使ってのプログラムを組むことは一種の遊び感覚で熱中してやっています。つまり、確かに給料を貰っている仕事の大半は遊びではなく仕事なのだけれども、ある程度は遊びと言えるものもある。そして、それ以外のものは確かに大半は遊びだけれど、家の片づけとか犬の散歩は多くはいやいややっているのも事実です。

中高生になったら、似たようなものでしょう。部活は自分で選んだという点で遊びに近く、趣味も遊びととらえているでしょう。問題は、学校の授業に関わることに遊びを感じているかどうかだと思います。確かに、競争に組み込まれ、勝ち組に入っている人はその競争が遊びになっているかもしれません。でも、それは他の人を踏み台にして――一般的に評価の上でも下位に位置づけられる負けている人がいなければ勝ち組になれないといった意味で――いるので、私たちが考える遊びとは違うと思います。個々の学びの中で、遊びとなっているものがないかどうかの問題です。

ここで、「仕掛ける」という意味が出てくるのではないでしょうか。大人が中高生に遊びを仕掛けるとは、授業などで、中高生が学びではあるけれども、遊び的に取り組むことができるような展開ができるかどうかという問題です。取り組み始めたとき、自分の問題とできるような提起ができるかどうか、ということではないかと思います。

その時に、提起する側はどのような意識でいるかが問題であるように思います。もし、最初に書いたように、「思い通りになる」つまり、彼や彼女が彼らなりにその課題を受け止め展開すると発想するか、教師が考える展開をすることを期待するか、といった違いが出てきます。

もともと、授業というときは、教える中

味＝伝達すべき文化遺産といってもよいかもしれません＝があって展開されるという想定です。ですから、カリキュラム（授業であるときは教科カリキュラムと限定的に言いますが）がなければならないとされています。もちろん、その中味を確定的な知識と限定せずに、各自の判断力とする場合もあります。ただ、日本ではそういった発想は極めて弱く、敢えて言うならば「測定可能」な客観化されるものを位置づける傾向にあったように思います。その文脈では、生徒は、ある意味で、教師の提起に対して「正解」を探すことが課題になってしまいます。それには、どれほどの面白さがあるでしょうか。確かに、その「正解」を見つけて教師に評価されることは一つの喜びであるかもしれません。でも、正解を見つけたとたんに、自分の探求は終わってしまう可能性があります。次の教師からの提起がなければ。

もちろん、自己運動するような、ただ「正解」を探させるようなものではない課題提起をすることのできる教師もいます。そのような教師は、とてもすぐれた教師だと思います。生徒の思考の先が見えるという意味で。にもかかわらず、一つ引っかかるところが残ります。やはり、お釈迦様の手のひらの中で動いている孫悟空のようなものではないか、といったものです。そして、あるところで、「思い通りになる」といった意識があるのではないかと疑っています。

私は、十年以上、教えるとは何かといったことを考え続けています。教えるものがあってもいいのですが、生徒が自ら学ぶということが、その「教える」とどう関わっているかが問題ではないかと思ってきました。その中から、生徒は「教える」ことがなくても、自分から学ぶのではないかと仮設を立てました。

その授業がこれまで何回か紹介してきている高校２年生の選択授業「現代社会と技術」です。自分から職業を調べるというものです。この授業では仕事を持っている人にインタビューすること、夏休みにアルバイトかボランティアをして体験記を書くこと、３泊４日の工場見学を主体とした研究旅行のまとめを書くこと、１年間のまとめとして原稿用紙15枚以上の職業に関するレポートを書くことといった課題を出しているだけです。ほとんど講義はしません。これは、最初に書いたこととの関係では、生徒が「思うようにならない他者」であるから、自己運動をさせることこそが必要だと考え、仕事を持っている人に直接関わる場を設け、そこに首を突っ込ませるという働きかけを行っているわけです。

だから、生徒たちは自分で学んでいきます。もちろん授業の課題だ、ということはあるでしょうが、その取り組みを見ると、いわゆる授業の課題として仕方なく取り組んだ、という域を大きく超えたものが少なからずあります。昨年の生徒ですが、インタビューをして次のような感想を書いています。

「職業インタビューは、私がこの授業を選んだ理由の一つだったので、やることができて嬉しかった。

最初は誰にインタビューしようか迷って、結構しめきりギリギリのところで母

の知り合いの桃太郎の田中さんにお願いした。電話でアポをとる時も、実際にインタビューする時もすごく緊張した。30分くらいで早々と終わらせようと思っていたのに4時間もお話ができた。長かったけれど、終わったら何だか心がホカホカと温かい感じがして、いい気分で家に帰った。

二度目もやっぱりしめ切りギリギリでお願いしてしまって提出が遅れてしまったけれど、終わった後は、これもやっぱりいい気分だった。普段合唱団で歌を教わっているだけの先生の、これまで歩いてきた人生を少し知ることができてよかった。

この二つのインタビューに共通しているのは、インタビュー後の大きな充実感だと思う。その人の秘密を握ったような気がして、おもちゃを独り占めした小さい子のようにニマニマしてしまう。なぜ充実感を得られるのかなと考えたら、その人のこれまでの人生を自分のこれからの人生に生かせるかも！と思うからだ、と気づいた。今の私は、一応趣味らしきこともあるし、将来なりたいなあと思う職業もあるけれど、これから気持ちが変わるかもしれないし、本当になれるのかなという不安などでいっぱいだ。でもインタビューをすることでその行き場のない不安が少し落ち着く気がする。その人が今の状態になるまでには色々な苦労や経験があることがわかって、私はどこかで苦労などを怖がっているけれど、苦労は当たり前で、それを乗り越えることが大事なんだと思う。だから私も怖がらないで色々なことに挑戦しようと思った。もちろん、この気持ちを忘れることもあるだろう。でもその時々で常に思い出すように心がけようと思う。インタビューをしたことは、これから私が将来を考えていく中で、貴重な体験になると思う。－後略－」（下線森下）

確かに初発は授業の課題ですが、やっている内に自分の世界となっていっているように思います。楽しんでいると言っていいでしょう。彼女は、夏のアルバイト・ボランティアの課題では、合唱団の先生の付き人を数日間させて貰い体験記をまとめていますが、なんとB4版の用紙36枚にびっしり書いているのです。夏休みの後半はその執筆に費やしたようです。文も新しい経験、発見に躍動しています。私には彼女は自分の世界をつくり、その中で遊びまくったのではないかと思いました。1年間のまとめも、パンを調べ、近くのパン屋さんに何日かボランティアをさせて貰い、自分の家でも焼いてみて、その作品を私にも試食させてくれました。

このように彼女が取り組むことはまったく想定できませんでした。「思い通りにならない他者」とは、私たちが働きかける子どもたちは、その働きかけ方がその子どもにマッチすれば、その子ども自身の中で自己運動を起こし、先の生物学的自然的学習意欲を喚起して、私が思うに、遊び的な学びが展開されていくのではないかと思います。